
負物語

朝谷 紘人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

負物語

【Nコード】

N7592Z

【作者名】

朝谷 紘人

【あらすじ】

“ 努力を知らない勝者なんか敗者より負けてるじゃないか ”

混沌よりも這い寄る過負荷、球磨川楔。

彼に勝利の味を教えた、

絶対的な勝利を手にする怪異とは！？

世界が変わったとき、＜物語＞は交錯する

これぞ現代の怪異！怪異！怪異！

青春は勝っても負けても君のもの。

みそぎスパイダー 001

僕みたいな出来損ないが物語の語り部を務めるのは、僕なんかよりよっぽど主役を務めるにふさわしい勝ち組達から批判の声が飛んできそうなものである。

まあ巷じゃ僕みたいに嘘つきで弱々しい戯言遣いがシリーズ通して主役を務めたり僕みたいに主人公と敵対する悪役の詐欺師がメインヒロインを押し退けて語り部に成り上がったとかいうこともあるらしいからこういう場があってもいいよね。

そう、この僕こと球磨川楔は少年漫画原作の物語の主役を務められるほど強くはないし、正しくもない。

僕には事実を無かったことには出来ても虚実をあつたことには出来ない。

相手を弱くすることは出来ても相手より強くなることは出来ない。番外編の主人公にはなることはできても本編の主人公になることは出来ない。

僕には相手を打ち負かすことは出来ても勝つことは出来ない、勝つたことがない。

生まれた頃から僕はあらゆる勝負に負け続け、その度に勝ちたいという思いは強くなった。

勝つための努力は山ほどした。男の子たるもの一度は悪を挫くカッコいいヒーローに憧れるものだ。当然僕にもそのような時期はあった。

少年漫画の主人公のような、かつこよく、正しいヒーローになりたかったのだ。

でもどれだけ努力したところで僕は僕、負け組は負け組であり勝利を手にすることはどうやっても出来なかった。

そんなことはとつくの昔に分かっていたことじゃないか。

僕は勝者にはなれない。

そんなことは13年前、初めてあの絶対的な勝者に会った日から分かっていた。

だから僕はあらゆる勝者を潰してきた。

幸せそうにしている連中の笑顔を片っ端から潰してきたのだ。

何食わぬ顔で、格好つけて、括弧つけて。

そんな僕を止めたのもやっぱりめだかちゃん　絶対的な勝者だった。

彼女みたいに正しい人間だったら僕も本編で主人公になれたのかな？
多分なれなかっただろう。

さあ、これはそんな僕が体験した本編でも番外編でもない、僕自身の物語。

勝者に一杯食わせる負け組の独り語り。

みそぎスパイダー 002

その日、僕たちは普段のように学園内で繰り広げられる激闘の非日常ではなく、むしろめだちゃん率いる僕たち生徒会にとっては非日常よりも珍しい、いたって普通の日常的な時間を過ごし、いたって普通に放課後を迎えた。

僕はさつさと帰り支度をすませ、そのまま生徒会室へと向かった。

こんな僕でもこの箱庭学園の生徒会副会長である。

僕みたいなのが生徒会副会長なんかやってるなんて国を守る気がない人間が政治家をやってるような滑稽さがあるが、しかし僕が副会長という大役を務めているのにもちゃんとした理由がある。

それはクラスの皆からの熱い思いのこもった組織票により無理矢理選ばれたとかじゃんけんに負けて渋々立候補したからとかではなく、生徒会長黒神めだかに直々に指命を受けたからである。

僕は生徒会戦拳の末、めだちゃんに敗北した。本来ならそこでの学園を去るつもりだった僕をあの娘は生徒会、それも副会長に任命したのであった。

まったく、つくづくおかしな娘だよね。

そういつたいきさつがあつて副会長になつたわけだが、今となつては生徒会役員のみならずとも仲良くやっていつてるつもりだ。

庶務の人吉善吉こと善吉ちゃんめだかちゃんの幼なじみだ。

本人はめだかちゃんを守る気で見たいけどなんといいっても彼は良くも悪くも“普通”、はたから見れば彼みたいなのがめだかち

やんみたいな怪物を守る意味も意義もない。

だけど彼じゃなければめだかちゃんと並び立つことは出来ない、彼には普通ながらそう思わせるような素質があると安心院さんは踏んでいるみたいだ。

そして書記の高貴ちゃん　阿久根高貴は中学時代、破壊臣としてその名を轟かせていた。当時生徒会長であつた僕（この辺りについては完全なイカサマなのであまり言及しないで欲しいな）の下で生徒会庶務として働く一方、破壊活動に勤しんでいた。そんな彼もやはりめだかちゃんに出会い、彼女に恋をしたことで変わった。その後柔道部に入り鍋島猫美の指導を受けたことで破壊臣の面影はなくなってしまった。

そして最後に会計の

「うーん……もうちょっとで届くんだけどなあ……」

会計の喜界島さんが教室から生徒会室の間にある廊下の自販機の底に手をつ突っ込んで手探りで何かを探していた。

喜界島もがな　水泳部から生徒会に1日320円で雇われているお金にうるさい少女。

金さえ払えばどんなに危険で、過酷で、下衆な仕事でも引き受けそうなものだ。

『やあ、どうしたの？喜界島さん。』

「あ、みそぎちゃん！ええと……実は自販機の下にお金を落としちゃったの……それより今何か凄く失礼な紹介された気がするんだけど……」

……気付かれていたらしい。

いくら過^{マイナス}負荷の僕とはいえ、ここで反省しないわけではない。
どれここは男らしく、120円までなら奢ってやろう。

『とりあえず、いくら落としたの』

「10円」

……安っ！

そんな額のために女の子が地べたに這いつくばって埃まみれになりながら自販機の底に手をつ込んでいたかと思うと泣けてくるぜ。
さすがの僕でもそこまではしない。

僕が“混沌よりも這い寄る過^{マイナス}負荷”ならばさしずめこの娘は“10円求め這いつくばる会計”といったところだろう。

「ねえ……みそぎちゃん、さっきから私のことバカにしてない？」

『ん？ああゴメンゴメン、喜界島さんの裸エプロン姿を想像してたんだ』

「どっちにしてもあんまり嬉しくはないね……」

『良いものを見た気分になったよ。お礼にジュースを奢ってあげる。』

当然それは建前であり、本当は地べたに這いつくばる彼女が可哀想だったからだ。

僕は可哀想な娘が大好きなんだ。

「本当に！いいの？みそぎちゃん？やったー！」

この娘、ジュース一本でいくらなんでも喜び過ぎである。
ここまで喜ばれるとあまのじゃくな僕としては、逆に奢りたくな
なってくる。

『ああ、構わないよ。』

まあ、そうひねくれていても仕方ないので、僕は自販機に300円、
僕と喜界島さんでそれぞれ150円ずつ、投入口に入れてボタンを
2つ押した。

選んだのはコーラを2つ、のはずだったが……

「……コーヒー？」

1つ目にはコーラが出てきたのだが、2つ目に出てきたのは喜界島
さんの言う通り、砂糖不使用のブラックコーヒーだった。

僕は確かにコーラのボタンを二回押したはずなのでコーヒーが出て
きたのは自販機の故障か何かだろう。

『喜界島さん、コーヒーは好き？』

「あんまり好きじゃないかな……」

『じゃあコーヒーは僕が飲むよ。僕はこう見えて3度の飯よりコー
ヒーが好きなんだぜ。』

「でもみそぎちゃん、コーラ選んだよね？ひょっとしてコーラが好
きなんじゃないの？」

バレてしまった。

実は僕は3度の飯も食べられなくなるほどに苦いものが嫌いだ。

ましてや砂糖の入っていないコーヒーなんて飲めるはずもない。
このコーヒーも生徒会室に持って行って砂糖をたっぷり入れて飲む
つもりだった。

僕がその旨を伝えようと喋り出す前に喜界島さんは

「あ、そうだ！」

と何かを閃いたようだ。

「じゃんけんで決めようよ！」

じゃんけんか。

名案のつもりなんだろうが何を隠そうこの僕、球磨川楔は勝ったこ
とがない。

それはじゃんけんも例外ではなく、ものの見事に勝率は0である。

「いくよー！じゃん、けん、」

そんな目に見えている勝負なんてする意味がないだろうというのが
実際のところだが、そのようなことを彼女に言ったところで仕方が
ない。

ここは……グーだ。

「ポンッ！」

そこで彼女がパーを出して僕の負け……そのはずだったが彼女がそ
の時出した手はチョキの形を示していた。

「あーあ、負けちゃった……じゃあこのコーヒーいただくね。楔ち
ゃんがせっかく奢ってくれたんだからたまにはブラックコーヒーも

いいかも」

なんていい娘なんだろう。

惚れちゃうじゃないか。

それに彼女、僕と違ってブラックコーヒー飲めるんだな……

いや、驚くべきところはそこではなく、今僕は確かに勝った。

じゃんけんとはいえ、人生で初めて勝利というものを手にした。

今まで負け続けてきた僕が、ここにきて初めて、勝利の味を知ったのだ。

これは一体どういうことだろう……

このときの僕にはここでの初勝利がどういった意味を持つのか知るよしもなかった。

みそぎスパイダー 003

ジューズを買い終えた僕たちはそのまま一緒に生徒会室に向かおうとしていた。

さっきのじゃんけんはきつと偶然だろう。

いくら勝ったことのない僕とはいえ、じゃんけんの勝敗を左右するのは実力も何も関係ない時の運、全ては神頼みだ。

きつと神様も疲れていたのだろう。

もしも自分の間違いを正しに僕のもとへ現れるようなことがあるならばブラックコーヒーでも奢ってやろう。

「ねえ、みそぎちゃん？」

「ん？なんだい？」

喜界島さんから突然声をかけられ、ハツとする。

「どうしたの？何か深刻な顔してたみたいけど。」

「いや、たいしたことじゃないよ。どうやったら喜界島さんの制服を裸エプロンできるか考えていたんだ」

「結構たいしたことだね……」

「いくら払ったらしてくれる？」

「結局お金なの！？ていうかしないよ！」

『1000円でどうだい？』

「私そんなに安い女じゃないもん！」

『10000円』

「……しないもん。」

『数行悩んだね。』

素直じゃないなあ。

僕みたいにもっと自分に素直に生きればいいのに。
本当は裸エプロンもやりたいんじゃないかな？
喜界島さんって意外と卑猥な娘だったりして。

「ねえ、みそぎちゃん。」

『なんだい、卑猥島さん。間違えた喜界島さん。』

「さらっとんでもない間違いしないでよ！それより、あれ見てよ。」

喜界島さんの指差す方向を見ると、教室の中に男子生徒が4人、机に向かい合ってなにやらカードゲームをしているようだ。

「見たところあれはトランプみたいだね。でも喜界島さん、この学校ではトランプ等カード類の持ち込みは禁止されていないじゃないか。それなのにトランプなんか指さして、どうしたんだい。」

「違うの、みそぎちゃん。ほら、あの人たちお金を取引してる。」

そう言われて見てみると彼らがトランプゲームをしている傍らには数枚の札束と小銭が置かれていた。

「なるほど、喜界島さんあれを狙ってるんだ。」

「うん、あれだけあれば何日分の生活費に……ってそうじゃなくて、高校生があんな大金学校に持って来られるなんて不自然だと思わない？ ほら、この間目安箱に何件もお金がなくなっただって投書があったでしょ。」

「ああそういえば。」

2週間ほど前からだっただろうか。

授業や部活動が終了した後、気が付いたらお金がなくなっているという投書が目安箱に殺到したのだ。

その金額の合計は確か9万円ぐらい。

当選僕たちも犯人探しのために従事しようとしたのだが、お金の問題となると僕たちだけでの解決は難しいと考えられたため、この問題は先生たちにまかせっきりになっていたのだ。

なにも報告がなかったためにつきり解決されたと思っていたんだけど……

『なるほど。彼らの仕業っていうせんもありえるね。』

「でしょ。でも証拠がないからなんて話しかけていいか分からなくて……」

証拠、か……

『よし、喜界島さん、僕に任せてよ。』

そう言つて4人組に話しかけに行く。

『やあ!』

「あん? 誰だてめえ?」

おお、予想以上に少年漫画の不良生徒にありがちな反応だ。

『はじめまして、僕は球磨川楔。ちょっと無くなったお金を探していてね。君たち随分お金持ちみたいだけど何か知らないかい?』

うん、われながら上出来だ。

「あん? 金だあ? 生憎これは1銭残らず俺らの金でなあ。」

「おい、平川! この球磨川楔つてやつ、あの生徒会長と互角にやり合つた副会長だぜ!」

別の男子生徒が説明に入る。

悪者が噂の副会長に恐れをなす……少年漫画らしくていい展開だ。

「ああ、あんたが例の副会長か。だが聞いた話によるとあんた、勝敗のはつきりしてる勝負には勝ったことがないらしいじゃねーか。」

……そこまで噂になっていたのか。全く、噂の副会長はおちおち勝負もできないぜ。

『なるほど、よく知ってるじゃないかい。だけど君、僕が勝負に勝ったことがないってのは大間違いだぜ。さっきもそこにいる喜界島さんとじゃんけんして、見事一発勝利したところさ。』

4人の視線が喜界島さんに集中する。「え？あ、うん、それは確かに本当だよ。」

すると平川という生徒がまた口を開く。

「はん！じゃんけんに勝ったぐらいで何を意気がってやがる。」

『いや、じゃんけんだけじゃない。僕は君たちとのトランプゲームにも勝利して、目安箱に投書されていただけの金額を取り返してみせる。』

「面白いじゃねーか。だがこっちは10万近くの大金を掛けるつてのにタダで賭けに参加しようってわけじゃねーよな。」

『もちろん、僕も大金を手に入れるためには大きな代償が必要だと思ってるよ。』

「ちょっとみそぎちゃん！いくら投書のためとはいえ、みそぎちゃんがそこまでの犠牲を負う必要はないんじゃないの？」

喜界島さんが止めに入る。

『いや、いいんだ。僕は生徒のために犠牲になるのが生徒会役員として当然だと思っているからね。』

「そんな、でも……」

『というわけで僕が負けたあかつきにはこの喜界島さんを差し出そう。』

「この人何も犠牲にしてなかった！」

『いやいや、僕は誰よりも大切な喜界島さんを犠牲にするんだ。あー悲しいなあ。』

喜界島さんも一応生徒会役員だしね。

「その嬢ちゃんを好きにしていってか……いいだろう。」

「よくないよ！」

喜界島さんの反対もむなく、交渉は成立。賭けがはじまることになった。

あーなんて可哀想なんだ喜界島さん。

僕らのお金と喜界島さんを賭けた勝負として行われる競技は大富豪。地方によっては大貧民ともいう。

各プレイヤーに均等にカードを配り、カードを出しあってその強さ

を競うゲームだ。

カードは3が最弱でそれに続いて4、5と数字が大きくなるにつれて強くなり、そしてキングから上はA、2と続き結果的に数字上では2が最強となる。

ただし大富豪には革命制度というものがあり、同時に4枚のカードを出せば革命が成立し、カードの強さは逆転する。同時に出せるのは同じ数字のカード、もしくは階段といって同じマークのカードの数字が3枚以上連続して順番に並んだ場合だ。

また縛りという制度もあり、二人のプレイヤーが連続して同じマークのカードを出した場合それ以降カードがきられるまでは同じマークのカードしか出せなくなる。

ジョーカーは全てのカードの代わりとして使用することが可能であり、数字上では最強のカードよりも強くなれる。

といったところか

「さらにこの大富豪には普通とは違うルールがある。」

平川君が説明を加える。

「カードには1つ1つ特殊効果を持たせる。

3と2は最弱のときにジョーカーが出された場合ジョーカーに勝つことの出来る唯一のカードとなる。

4が出された場合4がきられるまでその後に出されたカードは効果を失う。

5が出されたら出したやつ次の番のやつは順番をとばされる。

6が出されたときは順番を逆回りにする。
7を出したやつは次のやつに7を出した枚数だけカードを渡せる。
8を出したらそこまでのカードは全てきられる。
9を出したら9の数だけ次のやつとカードを交換できる。
10を出したら10の数だけカードを棄てられる。
Jを出したらJがきられるまでカードの強さが逆転する。
Qを出したやつはQの数だけ棄て札からカードを拾うことができる。
Kが出されたら全員のカードを回収してシャッフルし、もともと持っていた枚数に配りなおす。
これら全ての効果はAが出された場合打ち消される。
ジョーカーについては普段のルールと同じだ。

┌

『長たらしい説明わざわざご苦勞様。こんな面倒くさいこととしてまで勝負に勝ちたいみたいだけど残念ながら君たちはここで僕に負けるんだ』

「はんっ！やれるもんならやってみやがれ！」

さて、随分でかい口を叩いてしまったもんだが僕が勝ってしまうような間違いが二回も続くはずがない。

ここはゲームをしている隙をみて金を奪い、ゲームが終わった瞬間こいつらを螺伏せて喜界島さんを連れて逃げるのが正しい判断であるう。

だったら始めっからそうしろって？

勝ったのに報われないなんて状況の方がこいつらの悔しがる顔が見れて楽しいじゃない。

『では平川君とその他3名たち。最初で最後の出番なんだから精々いい勝負を見せるといい』

さあ、負け試合の始まりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7592z/>

負物語

2012年1月5日19時46分発行